

【聖書テキスト】

ルカによる福音書 13:31 ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」³² イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。³³ だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。³⁴ エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。³⁵ 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

1 キリストは私達を造り変える

会堂に集まって礼拝できない状況が続いていますので、礼拝について考えることが増えています。そこで思い起こすのは、礼拝に出続ける事で私自身が大きく変えられたこと。これは礼拝に欠かさず出席する仲間からも度々聞くことです。「教会の礼拝を知らなければ、私はどうなっていたか分からない。」礼拝にはイエス・キリストとの出会いがあり、イエス・キリストと出会い続ける時、人は新たに造り変えられるのだと思います。不思議なことです。

さて、私達はその主日礼拝で、ルカ福音書から共に聴き続けて一年以上になります。ようやく主イエス一行がエルサレムへ向けて旅をしているところに差し掛かりました。エルサレムへの旅の間、主は弟子達に神とはどういうお方か？神の国や神の救いとはどういうものか？を言葉と行いで伝えておられます。そして、そこにはイエス・キリストとの出会う礼拝が人間を造り変えるその理由が隠れていると思います。ご一緒に見ていきたいと思えます。

2 預言者の言葉にある神の義と愛

今日のテキストのキーワードの一つは、「預言者」という言葉でしょう。旧約聖書の時代、神に選ばれ、「人々に語れ」と神から言葉を預かった預言者達。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、アモス、ホセア等の預言者が語った言葉は、旧約聖書に「預言書」として残されています。その時代の状況も併せて旧約聖書の預言書を読んでいけば、神がどのようなお方かの一端をうかがいしることができるとも言えます。預言書を読んでみて驚く

事は、全知全能であり万物の創造者である唯一の神、被造物とは比べようもない存在である方が、人間社会の正義に重大な関心を示すお方であることです。社会で弱く小さくされた者を蔑ろにするような人間や社会に対して、神は激しく憤られ罰せずにはおれないのです。それがよく分かるのが、紀元前8世紀、南ユダ王国の農民であったアモスの預言の言葉を集めたアモス書です。彼は、隣の兄弟国・北イスラエル王国に派遣されます。当時の北イスラエル王国はヤロブアム二世統治のもと、経済的にはかつてないほどに繁栄しており、人々は北イスラエル王国が周辺諸国を圧倒する栄光の日が間近いと確信していました。しかし、繁栄を謳歌している北イスラエル王国の人々にアモスは次のように語ります。「主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに／わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で／貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ／悩む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い／わたしの聖なる名を汚している。祭壇のあるところではどこでも／その傍らに質にとった衣を広げ／科料として取り立てたぶどう酒を／神殿の中で飲んでいる。」(アモス書2:1-6) 北イスラエル王国の上層階級がいかに弱者を蔑ろにしているか、具体的に言及しつつ、支配者層の不正義を厳しく糾弾しています。金持ちは贅沢な生活をしているのに、貧しい同胞から衣をとりあげ葡萄酒をとりあげ、それらで自分たちの救いだけ求めて神殿で派手な祭儀を献げる。何も取り上げるものがなくなった同胞をわずかな借金のかたに奴隷として売り渡す。貧しい家の娘を金持ちの親子が性的欲望の対象として弄ぶ。神に対する不誠実で欺瞞に満ちた行いを重ねる人々に対し、アモスは「公正を水のように／正義を大河のように／尽きることなく流れさせよ。」(5:24)「わたしを求めよ、そして生きよ。」(アモス書 5:4)と言い、神の正義に生きることを求めます。

アモス書のこれらの言葉を読んでいると、まるで現代世界に神が語りかけているようです。少し前、ある有名芸能人が「コロナが終わると、お金に困った綺麗な女性達が風俗産業にやってくる。それを楽しみにしている」とラジオで発言し、聞いているスタッフから笑い声が起こったそうです。女性が食うに困って体売りのを、有名な芸能人が楽しみに待つと嬉しげに語る。現代は、「欲望の資本主義」が支配していると言われています。人々の欲望を実現させる事こそ正義であり、その正義を基本にして世界が成り立っている、アモスが怒りをもって摘発した事は、現代世界で、人々は仕方がないと受け入れ、行われていること。

しかし、聖書の神は、弱い者の人としての尊厳を蔑ろにすることは、神を蔑ろにすることであり、神に対する大きな罪を犯している事だと摘発し、その罪のゆえに北イスラエル王国は滅ぼされる…とアモスに宣言させるのです。神の目には、一人の貧しい娘の尊厳は、国家と同等の重さを持ちます。古代世界は言うに及ばず、現代世界でも考えられないことです。

このように、預言者の言葉から分かることは、聖書の神の正義とは、まず何よりも愛においての正義。特に小さくされている人々への愛です。現代世界で神の正義の名の許に権力者達が行う戦争が、実は神の正義とは似ても似つかぬものであることがよく分か

ります。愛を欠いた神の義はなく、正義を欠いた神の愛ありません。神の愛と義は不可分。神の義は他者への徹底した愛に根差した正義であり、神の愛は神の義に貫かれた愛です。不正を重ね続ける人々をそのままにするような甘やかす愛ではありません。

3 神の審きへの恐れ

だから、このような神の義なる愛、愛なる義の前にたって、それを完全に守り、そこに徹して生きることができる人間は、いないのです。「正しい者はいない、一人もない」と神は嘆いておられます。正しくない私達は、義なる神により裁かれねばなりません。しかし、被造物である私達が、創造者であり全知全能の神の審きを受けるのは、そら恐ろしいことです。全てを見通し誤魔化しなど一切利かない御神の御前です。滅びるしかない私たちです。だからでしょうか、私達は裁く神を受け容れようとはしません。神の救いの話には身を乗り出し耳を開きますが、神の審きになると耳を閉ざし顔を背けがちです。

しかし、神を真実に恐れるという事は、私たちにとって言葉にできない程、大切な事だと思います。神を恐れることなくして、神を神とすることはできないのです。私事で恐縮ですが、洗礼を受けてから何年かして、自分の罪を神から示された時、生まれて初めて神に滅ぼされるのではないか？という恐怖を感じました。教会の礼拝に行く前、神を知らずに生きている間にも、多くの間違いを犯し深い自己嫌悪に陥ることは何度もありました。しかし、「神という他者に裁かれ滅ぼされる」と感じ、戦いたことはありません。教会に通い礼拝し続けることで、キリストを通じて神という方の義を知り、自分の犯した罪に対する神の怒りを想い、御前に戦く者と変えられていました。

4 自由意思を尊ぶ神

ですが、この戦きは洗脳や強制の結果ではありません。神は完璧に正しい方であり、不義を一点も含むことができない故に、私達を裁かずにすますことはできません。が、神の義は徹底して愛でもありますから、私達を無理やり神の正義へと強制することもなさらないのです。他者を一つの存在として愛するという事は、相手を自由な意思を持つ一個の存在として尊重する事だからです。神は、私たちにご自身の義に従わない自由さえもお与えになっています。その結果、洗脳など簡単にできる全知全能のみ神にも拘わらず、ご自身の言葉を伝える預言者を立て神の民に呼びかけ招き続けるという手立てを取られるのだと思います。神はご自身の愛に徹するがゆえに義なる方であり、ご自身の義に徹するが故に愛なる方。預言者を立てるという事に、神が義なる愛、愛なる義の神であることの一端が表れているように思います。

しかしまた、そこに神の苦悩、預言者の苦悩が生まれます。神の義を受け入れる民は少なく、神から遣わされた預言者の多くは、迫害されるからです。神の都エルサレムのただ中で、神に背く者という烙印を押され石を投げつけられて死んでいった預言者もいます。神の民が神の遣わした者を抹殺しました。神の民でない人々、神を知らない人々が、

神を無視する事よりも格段に深い罪、神を苦しめる事でありました。いつ滅んでも仕方ないほどに弱く小さい民であり、実際にエジプトで奴隷として迫害され絶滅の危機にあった所を救い出され、神の民としての契約を交わしたイスラエルの民。神を示され神に愛され導かれた民が、自分達に不都合な神の言葉を受け入れず、殺そうとする。その罪深さは今日の聖書テキストにも現れています。

5 神の言葉を殺そうとするヘロデとファリサイ人

今日の聖書テキストで、神の言葉を語る主イエスを殺そうとするのは、ヘロデ・アンティパスです。ヘロデ大王の息子で大王の死後、ガリラヤ地方とヨルダン川の東側ペレア地方をローマ帝国の傀儡政権として統治していましたが、兄の妻を略奪し結婚した事を糾弾した洗礼者ヨハネを捕え頸をはねた事で有名です。彼は、自分の領地であるガリラヤで奇跡を行う主イエスの評判をきき、好奇心から会いたいと願ったようです。しかし、主イエスの言葉と業が民衆に大いに喜ばれ、待望のメシアかもしれないという噂がでると、支配者としての自分の地位が脅かされると恐れたのでしょう、主の殺害を企みます。そのヘロデの殺害計画を主に伝えたのはファリサイ派の人々。彼らの動機はよく分かりません。主イエスの身を心配しているだけかもしれませんし、自分たちを厳しい言葉で批判する主イエスが目障りなので、ヘロデの計画にかこつけ、自分達の町から追い出そうというのかもしれません。事情はどうあれ、ヘロデは主イエスを抹殺しようとし、ファリサイ派の人々は主イエスに自分達の場所から出て行ってほしいと願っていることは確か。両者ともに自分たちの場所にいて神の言葉と業を行う主の存在を邪魔だと思い、抹殺しようとしています。

「ここを立ち去ってください」と言って主や主の言葉を自分の場所から追放したいと願うのは、ヘロデやファリサイ派だけではありません。こうして礼拝を捧げている私達の日常生活にも、同じ事を願う気持ちがあるのではないかと思います。イエス様が共にいてほしいのは、礼拝の時と相当困っている時だけ、普段の生活では、自分が主人となって暮らすのが私達の常。今、神の御前に自分の日々の生活を正直に振り返ると、あの時、主を追い出したファリサイ派であり、この時には主の言葉を殺そうとするヘロデでした。

6 「あの狐」

主イエスはこう答えられます。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。」主はヘロデ・アンティパスを「あの狐」と呼んでいます。当時のユダヤの人々は狐を冷酷で狡猾であり、獰猛なものと受け止めていました。ヘロデは、他者を思いやれず自己中心的で獰猛であり、卑怯な方法をも厭わない狡猾な指導者であったことが伺えます。

「魚はお頭から腐る」という諺にあるように、社会や組織のトップ、支配者がおかしけれ

ばみな上に倣えと社会全体が急速に腐敗していき、弱く小さくされた人々の困窮を顧みる人は少なくなる事の譬えです。まさに今の日本を見るようです。主イエスがヘロデを「あの狐」と呼んだのは、指導者ヘロデに象徴される人間社会の不正義に強い怒りを覚えられたのだと思います。

7 三日ですべてを終える

主は続けて、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とおっしゃいます。「悪霊を追い出し病気をいやす」とは、サタンの虜になっている人々を解放し、神の御許に連れ帰るという神の業です。主イエスはここで、「ヘロデの殺害計画があっても、私はやるべき事をやる。今日も明日も言葉と行いで、神のご支配が私と共にすぐ近くまでやってきたことを告げ知らせ続ける」と仰っています。

次の「三日目に全てを終える」。一日、二日、三日…と数えられる短い期間のうちに、主イエスの地上での神の業、救いの業が成し遂げられると言われます。主イエスが地上で神の業を行うのは、限定された期間なのです。そして、その業は、エルサレムでの十字架の死と三日後の甦りで完成します。ヨハネ福音書は主の最期をこう描いています。「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。(中略)イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」(ヨハネ19:28、30) この「成し遂げられた」とか「実現した」が、32節の「終える」と同じ種類の言葉。つまり、十字架上の死によって、主イエスが地上でなすべき救いの御業が成し遂げられ、それ以後は、終末に向かう新たな段階に入る、「三日目に全てを終える」とはその事を示しているのだと思います。

8 神の意思

そして、この十字架と復活への道を進むことは、主イエスが決めた事ではなく神のご意志であり、神の救いの計画です。33節「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。」のうちの「進まねばならない」の「ねばならない」が、聖書では神の確固たる意志を表現する時に用いられている言葉だからです。主イエスは神のみ旨に生きておられます。神のご意志が主イエスはエルサレムで死ぬこと。ですから、主がエルサレムに到着する前にヘロデに殺されることはありえません。そして、主が進んでおられるのは、ご自身の死へと向かう道、神の言葉の死をご自身で死ぬために、主はエルサレムへと向かっておられます。神が最も愛した都で、神に真に選ばれた神の御子が殺される、それがほかでもない神の御心…人間には到底理解できぬ、神の裁きと救いの底知れぬ深さを思わせます。

9 エルサレム、エルサレム

次の34節の嘆きには、神の言葉を殺す神の民への、神ご自身の想いがほとばしり出ているように思います。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」主イエスは、ご自身の経験を語っているというより、神から預かった言葉を語っておられます。

何度も民を身許に集めようとした神ご自身が呼びかけます、「エルサレムよ、エルサレムよ」。聖書で神やみ使いがその名を二度重ねて呼びかけるのは、「いとしい者に対して私の方を向いて欲しい」という強い想いを表しています。焼き尽くす犠牲としてイサクを神に献げるためにまさに鉈を振り上げるアブラハムを止める時、御使いは「アブラハム、アブラハム」と二度叫びました。エジプトからイスラエルの民を救い出す指導者としてモーセを選び出す時も、燃える柴に気づいて不思議に思ったモーセに対し神は、「モーセ、モーセ」と二度呼びかけておられます。アブラハムやモーセに呼びかけたのと同様に、神は強い想いを込め、ご自身が深く愛するエルサレムの名前を呼びます。ご自身の民をお腹の底から呼びかけます。それは、「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとした。」という譬えに現れている神の憐れみ。お前たちは、私の雛、いとしい存在、滅んでよい者ではない！

確かに神の義は、鋭く私達を裁き打ち砕かざるを得ません。しかし、それは私達への愛ゆえの審き。私達をうち滅ぼすことが目的ではなく、討ち滅ぼした後に新たに造り上げるための審きなのです。審きによってきよめられないと、罪の汚れ多い私達は神のみ翼の下に憩えないから。神は私達を聖め造り変え、ご自身の翼の下に集め、命を奪って滅ぼそうとする獰猛な者から守ろうとされているのです。その為に、私達をご自身の審きへと招こうとされています。しかし、「お前たちは、私の招きに答えることはなかった」。雛に獰猛な狐の牙が迫っています。結果は火を見るよりも明らか、滅びです。34節は愛する者の滅びを前にして、突き上げて来る神の嘆き悲しみ、慟哭が描かれています。

10 見捨てられたのは誰？

だから「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」。「お前たちの家」というのは、エルサレム神殿を指していると言われます。神の民を神が捨て去られることが預言されています。しかし、実際に起こったことはどうでしょうか。先ずエルサレム、神の民を見捨てる前に、父なる神が見捨てた者がいたことを私達は忘れてはなりません。「見よ！見棄てられる者を！」と主イエスが指し示す先にあるのは、誰か。誰でもなく、主ご自身、十字架の上に苦しまれているご自身がいます。父なる神はまず、独り子を徹底的にお見捨てになりました。神の御子が「我が神、我が神、何故私をお見捨てになったのか」と叫んだのですから、間違いのないことです。

神ご自身は創造主であり人間ではないので、神がその罪を償うことはできません。だ

からこそ、神と全く等しい御子を完全なる人間としてこの世に遣わし、人間の代表として罪を裁いたのです。そこには、雛の命を狙う狐の鋭い牙から守る為に、自分の身を挺して戦う雌鶏以上の必死な愛があります、ご自身の義に貫かれた愛があります。神の御子がまことの人として徹底的に見捨てられ裁かれたからこそ、私たちは滅びへと定められた審きを免れる事ができました。私たちの滅びをまことの人にしてまことの神・イエス・キリストが死んでくださったからです。神はこの方を三日目に甦らせてくださり、その後に聖霊を注いでくださいました。そして、主イエスの十字架のもとでの神の審きが全く新しい命を与える審き、恵みの審きである事を示してくださいました。私たちが主イエスの十字架のもとで礼拝するという事は、イエス・キリストに縋り、イエス・キリストと共に、罪人である自分の命を十字架で死ぬということ。その時、私たちは、キリスト・イエスの一部として新しい命の内に神の子として甦ることができるのです。それが、教会の礼拝で私たちに起こっていること。だからこそ、私たちは、礼拝し続けることで変えられ続けるのだと思います。

11 審きへの道

十字架と復活を記念して捧げられる主日礼拝は、神の恵みの審きの言葉を聞く所。礼拝する時、神を恐れ敬う心で、神のみ前にひれ伏すように礼拝したいと願います。この点、自宅でネット中継を見ながら礼拝している方々には戦いがあると思います。しかし、自宅にいても会堂で礼拝するように神を畏れ敬う気持ちをもって、讃美歌に合わせて賛美し、祈りと告白も共に行って頂きたいと願います。みな、礼拝は神の恵みの審きの場であるという恐れをもって礼拝してこそ、体は離れていても霊では一致して主の十字架のもとに立つことになるからです。主の十字架のもとこそ、神の恵みの審きが起こった場所。私たちは恐れおののきをもって神を見上げ、礼拝したいと思います。そのような礼拝を重ねて行く時、私たちはキリストの一部としてつくりかえられていきます。今日からまた次の礼拝に向けての一週間が始まります。それは神の恵みの審きへの道。私たちの群れの先頭を主イエスが進んでくださっています。横浜教会の仲間と共に、喜びつつ主イエスについて行きたいと思います。恵みの審きの道こそ、神の御翼の下にある道だからです。